

Title	近世オスマン帝国都市の慈善と救貧
Sub Title	Charity and poverty in early modern Ottoman cities
Author	藤木, 健二(Fujiki, Kenji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.3 (2018. 2) ,p.141(365)- 160(384)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム「環地中海都市の慈善と救貧：中世から近世へ」
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20180200-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20180200-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 近世オスマン帝国都市の慈善と救貧

藤木 健 二

### 一

近世オスマン帝国史研究では、一九三〇年代以来、慈善と救貧の中核を成すワクフの実証的な検討が進められてきた。そこではワクフの都市・地域開発における重要性や、家族の資産形成・相続との関係、現金ワクフの普及と運営、女性によるワクフ創設の政治的・経済的・社会的意義などの問題が検討され、オスマン帝国のワクフの特徴として水平的・垂直的な普及・浸透や機能的な持続性・柔軟性・多様性が強調された<sup>1)</sup>。これらの研究においてワクフの具体的な慈善機能は長らく看過される傾向にあったが、一九八〇年代に入ると都市の代表的なワクフ対象施設である給食所 (imaret) の運営と社会的役割に研究者の注目が集まり、そこでの食事の無償提供を中

近世オスマン帝国都市の慈善と救貧

心とする慈善機能が具体的に検討されるようになった。二〇〇〇年代には、中東・イスラーム世界史研究の全体的傾向として慈善・救貧への関心が高まるなか、A・シムンガーが『イスラーム社会における慈善』を著してその多様性を明らかにし、以後の研究の可能性と課題を示した<sup>2)</sup>。これを受けて近世オスマン帝国史研究においても都市を中心とする多様な慈善・救貧活動が着目されるようになり、個々の実態解明と政治的・社会的・文化的側面からの多面的な考察が進められつつある。

本稿では近年の慈善・救貧史研究の進展とその重要性を踏まえ、まず一九世紀初頭までのオスマン帝国都市における慈善・救貧をめぐる研究の現状と課題を整理していきたい。対象地域は原則として帝国中心部であるアナトリアとバルカンに限るが、必要に応じてアラブ史研究

にも言及する。また、研究の現状と課題を整理した上で、慈善・救貧と密接に関わる物乞いについて一八世紀前半のイスタンブルに関する台帳史料に依拠して若干の考察を試みたい。

二

イスラーム法の定める慈善は、一種の財産税である義務的喜捨のザカート (*zakaat, zekāt*) と神に近づく最良の手段として奨励された自発的喜捨のサダカ (*sadaqa, sadaka*) から成るが、オスマン帝国では前者を管理・監督する公的制度・機構が存在せず、後者が慈善・救貧における重要な位置を占めた。<sup>(3)</sup> 近世オスマン帝国中心部に関する従来の研究は、こうしたサダカの一形態であるワクフに基づく慈善施設・制度と、受益者である貧者や弱者という二つの問題を中心に進められてきた。

ワクフをめぐる研究では、給食所や病院 (*bimaristan, bimarhane, tumarhane, şifahane, dâri's-şifâ*) などのワクフ対象施設のほか、現金ワクフに基づくアヴァールズ・ワクフ (*avârız vakfi*) や同職組合ワクフ (*esnâf vakfi, esnâf sandığı*) などが具体的な考察対象とされた。人々に無償で食事を提供する給食所は、一四世紀以降、スル

タンを始めとする支配層のワクフ対象施設として、また多くが複合施設 (*külliyeh*) の一部として各地の都市に建設され、その数は一六世紀末までに百軒以上に達した。<sup>(4)</sup> 最も基本的かつ重要な慈善・救貧行為である食糧の施しは、修道場やマドラサ、墓廟、有力者の邸宅などでも日常的にみられたが、その機能に特化した給食所は都市の中心のかつ特徴的な慈善・救貧施設としてワクフ研究の初期から一定の関心を集めてきた。<sup>(5)</sup> 一九八〇年代に入ると、十分な検証のないまま慈善機能を過大評価する傾向にあった従来の見方を批判的に捉え、都市社会における給食所の役割を具体的に検証する個別研究が行われるようになった。一五一一六世紀エディルネに関するH・ガーバーの研究は、計一一軒の給食所が都市の成年男子人口の半数以上に相当する約二六〇〇人分の食事を毎日提供した事実を根拠として都市の食糧供給や貧者救済における給食所の重要性を強調した。<sup>(6)</sup> これに対してイスタンブルのファーティフ複合施設 *Fatih külliyesi* に付属する給食所の運営実態を検討した林佳世子は、貧者よりもむしろ複合施設の職員や宿泊所を訪れた旅人、マドラサの教授や学生がそこでの主要な慈善対象であったとした。<sup>(7)</sup>

エルサレムのハセキ・スルタン給食所 *Haseki Sultan*

imaret)に関する一連の研究は給食所研究の発展に大きく貢献したといえるが、とりわけA・シンガーの二〇〇二年の研究は、慈善・救済の多様性を視野に入れつつワクフ創設者としての女性の政治的・社会的役割や食糧供給政策と給食所の関係などを検討した点で重要であろう。彼女はその後も帝国内の給食所の地理的分布や給食受給者を制限・選別したメカニズムなどの検討をおしてその全体像の構築を試みた。<sup>(9)</sup>二〇〇七年にはオスマン帝国の給食所を多面的に考察した論文集が刊行されたが、そのなかで創設者である支配層と受給者である臣民との関係における給食所の象徴的・儀礼的意味を検討したC・ノイマンは、各地における給食内容・方法の共通性に着目し、地域を超えて受給者に共通体験を提供する給食所が支配権力の理想とする世界観や社会秩序を帝国内に浸透させる役割を果たしたと主張した。<sup>(10)</sup>

バルカンの給食所は一四世紀後半以降のオスマン帝国の進出・征服と関連づけて検討されることが多かった。すなわち征服当初のバルカン諸都市には既に多数の給食所が存在し、都市住民の多数派であるキリスト教徒も給食の対象とされたことや、その財源が現金ワクフとして運用されたことなどが明らかにされ、キリスト教徒の取

り込みや地域のイスラーム化・オスマン化、都市の社会的・経済的發展に果たした役割が強調されてきたのである。<sup>(11)</sup>

一四世紀末以降、無償で診察や治療を行うワクフ対象施設としてブルサやエディルネ、イスタンブル、マニサ、メッカなどの各地に病院が建設された。多くはスルタン・母后・大宰相らを創設者とし、複合施設の一部を成した。その研究の基礎はB・N・シェフスヴァールオールの広範な医療・医学史研究<sup>(12)</sup>によって築かれたが、その運営や治療の実態を実証的に解明する試みは二〇〇〇年代以降のF・ウナンらの諸研究<sup>(13)</sup>に始まったといえよう。ここではイスタンブルのファーターフ複合施設付属病院やブルサのユルドゥルム病院Yıldırım dâri's-sâisîs)における医師・職員の種類や人数、診察・治療のあり方が具体的に検討されたのである。慈善機能をより重視したM・シェフェル(シェフェル・モセンソン)は病院創設の動機と背景、利用者の理念と実態、病院の開放性、疫病への対応などを考察し、病院は共同体や集団全体よりも個人の医療を想定した施設であり、その慈善対象は事実上ムスリムの成年男子に限られていたと結論つけた。<sup>(14)</sup>

現金を主要な財源とする現金ワクフが一六世紀以降の

帝国中心部において普及・定着すると、都市の街区や同職組合では少なくとも一七世紀までに相互扶助や慈善・救貧の手段として現金ワクフが活用されるようになった。<sup>(15)</sup> 街区の運営するワクフは、街区住民に課せられたアヴァールズ税 (avârza divânye) の支払いを目的としたことからアヴァールズ・ワクフやアヴァールズ金庫 (avârız sandığı) と呼ばれたが、多様な公共・慈善目的にも用いられた。<sup>(16)</sup> これまでイスタンブルやブルサ、アンカラなどの事例から実態解明が試みられてきたが、一八世紀ブルサのアヴァールズ・ワクフは、街区内外の人々に一〇パーセントから一二・五パーセントの利子で現金を貸し出して財源を運用し、その収益を税の支払いやモスク、マドラサ、修道場、教会、水道、公衆トイレなどの公共・宗教・教育施設の維持や管理に充てた。幾つかの街区では貧者や弱者、学生、修道者に食事や現金を支給したり、祝祭・祝日に人々にヘルヴァ (helva) や蜂蜜入りシロップ (bal şerbet) を施すこともあった。<sup>(18)</sup> A・シンガーは、このように相互扶助や慈善・救貧の手段としてアヴァールズ・ワクフが機能するためには、寄進者である富者と受益者である貧者が同一街区に共存する必要があったとする仮説を示した。<sup>(19)</sup>

他方、現金ワクフのもうひとつの形態である同職組合ワクフについては、一七世紀イスタンブルと一八世紀後半ブルサの事例からその地域・時代・業種ごとの多様性が明らかにされつつある。<sup>(20)</sup> 例えば一七世紀イスタンブルの馬具工組合 (serîac tâiesi) では、ある馬具工の寄進した二万アクチェを代々の組合長 (kethîdâ) が現金ワクフとして管理・運営し、その収益は馬具工房群で働く貧者 (serâhâne hukarâsi) への食事の施しに用いられた。<sup>(21)</sup> また、必ずしも現金ワクフに基づく制度ではなかったが、一八世紀イスタンブルにおけるユダヤ教徒の肉屋組合のように、成員から定期的に一定の現金を徴収し、貧しい成員の結婚費用や治療費として再分配する同職組合も存在した。<sup>(22)</sup>

イスラーム社会における貧者・弱者は、宗教的義務や神に近づく善行である慈善・施しの理想的な対象として必要不可欠な存在であった。<sup>(23)</sup> オスマン帝国中心部の貧者・弱者に着目した研究としては、彼らの多様性や選別化・差別化、主体性などを論じた E・ギニオの研究が<sup>(24)</sup> 重要であろう。「貧者」は普遍的・固定的概念ではなく、状況や場面に応じて特定の条件下の貧者に限定されたほか、ワクフ対象施設職員などの必ずしも経済的貧者

ではない者が貧者と見做され得た。こうした多様性や可変性は、従来アラブ史研究において慈善の選別化・差別化や開放性・排他性に関わる問題として度々議論されてきたが、ギニオは一八世紀サロニカにおいて公的・制度的慈善が優遇したのはワクフ対象施設の関係者や街区・同職組合に属する貧者であり、社会的ネットワークから外れた移住者、逃亡奴隷、未熟練労働者、行商、物乞い、解雇された元使用人、孤獨な女性などの構造的貧者にとっては不特定多数を対象とした非制度的慈善がより重要であったとした。<sup>(27)</sup> さらに一部の貧者が都市への移住やイスラームへの改宗、犯罪などによって、或いは自身の子供を里子や使用人に出すことで主体的・自発的に貧困からの脱却を試みた事実から、貧者は必ずしも自身の運命を他者に委ねた受動的な存在ではなかったと主張したのである。<sup>(28)</sup>

「サダカの請願 (sadaqa 'arzuhal)」もこうした貧者の主体的行動のひとつとみることができよう。あらゆる問題をめぐって中央政府や各地のカーディーなどに向けて行う請願 ('arzuhal) は、正義・公正 ('adi, 'adāle) の実現に深く関わる帝国臣民の重要な権利であった。<sup>(29)</sup> この権利は貧者や弱者にも認められ、彼らの支配権力に対す

る直接的な窮状の訴えと喜捨の要求は、しばしば国庫からの現金の支給、給食所での食事の優先権、ジズヤの免税などの成果を彼らにもたらした。これまでに明らかにされた具体的事例はかなり限られるが、例えば一八世紀前半に麻痺や病気を患い、物乞いを余儀なくされる程の貧困状態に陥った寡婦のラヒーマ Rahime は、「サダカの請願」によってイスタンブルの関税収入から一日二アクチェの「俸給 (vazife)」を受け取る権利を獲得したのである。<sup>(30)</sup>

孤児 (yetim, öksüz) や捨児 (lakı) 、家事使用人 (hizmetçi, hizmetkar) といった子供の慈善や貧困をめぐる問題も近年研究者の関心を集めつつある。オスマン帝国に孤児や捨児の養育施設が現れるのは一九世紀後半になってからであり、それ以前は主に孤児の親族や捨児の発見者らが養育・教育に責任をもったが、ワクフに基づくクルアーン学校 (mektep, mu'allimhane) や「孤児基金 (eytâm sandığı, eytâm kesesi)」と呼ばれる後見人制度がそうした子供たちの支援に中心的な役割を果たした。<sup>(31)</sup> これまでの研究によれば、クルアーン学校ではそこに通う孤児や貧しい子供に一日二回の食事を提供し、年に二回、衣服一式を与えることや孤児を優先的に入学させる

ことが規定とされたほか、毎年春に教師とともに出かける行樂 (teleitic) の費用を子供たちに支給することもあった。<sup>(33)</sup> 他方、一六世紀ブルサや一八世紀イスタンブルの「孤児基金」に関する Y・ジェザルらの研究によると、カーディーによって任命された後見人 (vasi, kayyum) は孤児が成人するまでその遺産を管理・運用し、有利子の貸与などで得られた収益から孤児の養育費を賄った。その管理・運用の状況はカーディーによって不定期に監査された後、<sup>(34)</sup> 法廷台帳に記録された。なお、捨児 (latik) に関する一六世紀以降の各地の事例によると、モスクや路地などで発見された捨児の多くは発見者によって養育され、養育者はその費用 (nataka) を成人後、本人に対して、或いは見つかった生みの親に対して請求する権利を法廷で認められることがあった。<sup>(35)</sup>

経済的貧困に苦しむ親が幼い子供を富者の家事使用人とする行為 (icat-sagiri) は、少なくとも一六世紀以降、帝国中心部の各地でみられた。<sup>(36)</sup> 一八世紀サロニカの事例を検討したギニオは、預けられた使用人の多くが六―七歳の少女であり、自身の衣食住や労働環境を主人の善意に完全に依存した彼女たちが俸給の不払いや暴力・虐待などの不当な扱いを受けた事実を明らかにしつつ、こう

した使用人の雇用が慈善行為であった反面、貧しい女性の社会的周縁化をもたらしたと主張した。<sup>(37)</sup> これに対して Y・アラズは、家族からの隔離や労働の強要、搾取・虐待といったその否定的性格を認めつつ、主人による保護や養育が子供を飢えや過度の早婚から救う役割を果たしたとする見方を示した。<sup>(38)</sup> また彼は、とりわけ一八世紀後半以降、アナトリアとバルカン各地の子供が使用人としてイスタンブル住民に預けられる傾向が強まったことを指摘し、その理由としてイスタンブルにおける家内奴隷の減少や移住者・季節労働者の増加を挙げた。<sup>(39)</sup>

非ムスリムと慈善・救貧の関係については、バルカンを中心とする都市内外のギリシア正教会・修道院のワクフ化をめぐる研究がとりわけ大きな進展をみたといえる。そこでは教会や修道院が政府による財産没収の対抗策として自らを事実上の受益者ないしワクフ対象施設とすることに腐心した事実が明らかにされ、ビザンツ帝国からオスマン帝国に至る教会・修道院制度の連続性やワクフの柔軟性・開放性が議論されてきたのである。<sup>(40)</sup> これに対して非ムスリムの慈善・救貧や貧者の具体的実態は余り解明が進んでいないが、一六世紀イスタンブルのユダヤ教徒の貧者については、M・ローゼンが富者・有力

者との関係や街区・宗教共同体における社会的地位などを中心に検討した<sup>(41)</sup>。また、J・アレクサンダーとS・ライオウは一七一一八世紀の帝国中心部の諸都市においてギリシア正教徒に固有の病院が多数創設された事実に着目し、当時のギリシア系商人の活躍や新たなエリート層の登場と関連づけて論じた<sup>(42)</sup>。

これまでみてきたように、近世オスマン帝国中心部の都市における慈善・救貧の研究は、主にワクフと貧者・弱者に焦点をあてて進められてきたが、そこで対象とした地域・時代や依拠した史料はかなり限定的であり、更なる史料調査・分析とそれに基づく事例の蓄積が今後の重要課題といえよう。それにはワクフ設定文書 (*vakfiyye*)・会計簿 (*vakfi muhasebe defteri*)・調査台帳 (*vakfi tahiri defteri*) などのワクフ関連文書やシャリーア法廷台帳 (*ser'iye sicil defteri*) といった諸史料を慈善・救貧の観点から読み直す作業が必要不可欠である<sup>(43)</sup>。慈善・救貧の多様性を踏まえ、その全体像を再構築するためには、これまで余り着目されてこなかった行為・施設・制度の考察にも正面から取り組む必要があるだろう。例えばスーフィー教団の修道場がもつ慈善・救貧機能は、その運営実態や社会的役割の問題と対照的に殆ど検討さ

れてこなかったといえる<sup>(44)</sup>。この他に砂糖祭・犠牲祭などの宗教的祝日や結婚・葬儀における施しのほか、集団礼拝に参加するスルタンが宮殿とモスクを往復する際に行われた「金曜行列 (*cum'a selâmlık, cum'a alayı*)」や、王子の割礼や王女の結婚を祝って催された「王家の祝祭 (*sif'a-humâyün*)」にみられる慈善<sup>(45)</sup>、その隔離性や閉鎖性から「癩病者の修道場 (*miskinler tekkesi*)」とも呼ばれた癩病院 (*cizzânhâne, miskinhâne*)<sup>(46)</sup>、身寄りのない子供・若者に竈部屋 (*külhan*) を寝所として開放した公衆浴場 (*hammâm*)<sup>(46)</sup> などと同様の検討課題として挙げることができよう。

支配権力と慈善・救貧の関係については、スルタンが自己の宗教的救済と同時に自身の公正さ・敬虔さ・繁栄を臣民に可視化する目的で大規模な慈善を展開したとする従来<sup>(47)</sup>の見方を具体的事例に基いて検証することがまず必要であろう。また、M・ゲンチは特定集団の富裕化を抑制する政府の平等主義的政策が結果的に経済格差の是正や貧者の減少をもたらしたと主張したが<sup>(30)</sup>、こうした支配権力と貧者・弱者の関係を理解するためには後者の選別化・差別化や主体性・自発性、さらにイスタンブルの人口抑制策にみられた前者による「不審者」の排除・排



斥といった問題にも注意を払うべきであろう。この問題に關連して、従来、公共空間における慈善の重要性が度々強調されてきたが、前述のアヴァールズ・ワクフや個人間の施しといった私的空間における慈善の役割も軽視してはならないように思われる。その点で、施与者と貧者・弱者が直接顔を合わせることなく現金や食糧のやりとりを行う場として機能した「サダカの石 (sadataka tasi)」と呼ばれる石柱・石台は興味深い考察対象といえよう。この他、慈善・救貧の地域的な差異性や政治的・経済的・社会的変動との關係、ビザンツ帝国やルーム・セルジューク朝からの影響・連続性といった問題も今後議論していかなければならない課題であろう。

三

近世オスマン帝国中心部の物乞い (dilienci, sâii, cettâr) に関する従来の研究は、イスタンブルにおける政府の管理や取締りを中心に進められてきた。まず Z・テキンや M・デミルタシユによって身体強健な者の物乞いの禁止や、老若・病者・障害者への「物乞い許可証 (cettâr kağıdı)」の発給、バシユブー (başbuğ) と呼ばれる役人による管理・監督、不当な物乞いを対象とした追

放令といった一連の政策が明らかにされた。その後、これらの諸政策を比較検討した N・オズベクは、一八世紀後半以降、政府が物乞いを追放して地方の労働力として活用する政策や物乞いから脱却させるための支援を推進した事実から、政府の物乞いに対する方針が従来の限定的な容認から完全な排除へと次第に変化したとする見方を示した。こうした物乞いと政府の關係は、今後、人口流入や社会不安の増大といった都市社会の様々な問題と關連つけて議論される必要があるだろう。物乞いの生活や活動については、彼らの多様かつ巧妙な手法や手口、墓地を徘徊する物乞い集団、視覚障害者・奴隸・病者などに物乞いを強要して利益をあげる組織などの事例が断片的ながらも明らかにされつつある。

このように物乞い研究は初動の段階にあり、今後、多様な地域・時代における具体的事例の蓄積が求められるが、本稿では首相府オスマン古文書館に所蔵された一冊の台帳史料を可能な限り丁寧に読み込みつつ、一八世紀前半のイスタンブルにおける物乞いについて若干の考察を試みたい。

一七三六年七月四日の日付が付されたこの台帳には、冒頭の「イスタンブルとガラタ Galata に住む視覚障害

表：イスタンブルにおけるキリスト教徒の物乞い（1736年）

	出身地	人数	配偶者 有り	子供 有り	視覚 障害者	下肢 障害者	上肢 障害者	病者	老者	健康
1	キオス島	57	9	12	2	2	3	6	4	33
2	地中海諸島	40	3	1	10	5	2	6	5	4
3	ルメリ	36	1	1	18	3	2	7	3	4
4	アナトリア	14	3	1	4	1	1	6	2	0
5	イスタンブルないし不明	146	9	3	33	3	4	12	27	5
	合計	293	25	18	67	14	12	37	41	46

典拠：Başbakanlık Osmanlı Arşivi, Cevdet Belediye no. 7597, d. 24 Safer 1149 (1736/7/4).

者や病者の物乞い（a  
'mâ ve 'alî sâ'iller）を  
個々に記した台帳であ  
る」という記述に続く  
て、物乞いの名前が配  
偶者・子供の有無、身  
体的・精神的障害や健  
康状態、出身地、イス  
タンブル滞在歴などの  
情報とともに一人ずつ  
記録されている。ここ  
に記された計二九三人  
はすべてキリスト教徒  
である。末尾には毎週  
日曜日に教会（kilise）  
の門前で行われる富者  
（agnivâ）による施し  
（fianet）に関する簡潔  
な規定が付記されてい  
る。二九三人の物乞い  
は出身地に応じて①キ

オス島 cezire-i Sakuz（五七人）、②地中海諸島 Akdeniz  
cezireleri（四〇人）、③ルメリ Rumeli（三六人）、④ア  
ナトリア Anadolu（一四人）、⑤イスタンブル出身者お  
よび出身地不明の者（計一四六人）の順に列挙されてい  
る。このうち性別が記述から明らかでない二六八人をみると、  
男女の内訳は二二〇人と四八人であり、それぞれ全体の  
七五・一パーセントと一六・四パーセントを占めた。

出身地別の人数と配偶者・子供を有する者、障害者、  
病者、老者などの内訳は表のとおりである。それによる  
と配偶者ないし子供を有すると明記された者はそれぞれ  
二五人と一八人に過ぎず、全体の僅か八・五パーセント  
と六・一パーセントである。多くの場合「トドリ Todori、  
その妻（zevesi）、その息子（evlâdî）」のように配偶者  
や子供の名前は記載されておらず、彼らも物乞いであつ  
たか否かは不明である。その他の親族に関する唯一の記  
述として、キオス島から八ヶ月前に移り住んだニコラ  
Nikolaに二人の兄弟（karındaş）がいたことが記されて  
いる。身体・精神障害や健康状態などに関する記述は全  
体の七二パーセントにあたる二二一人においてみられる。  
視覚障害者（ama）が六七人と最も多く、「健康  
（sag）」と記された者は四六人、老者（ihtiyar）は四一

人、病者 (alı, matiz) は三七人、下肢障害者 (topal) は一四人、上肢障害者 (colak) は一二人であった。この他に言語障害者 (dilsiz) 、ジンに取り憑かれた者 (mecün) 、独眼 (yekesim) の者、「震えの病 (râse marazi) 」を患った者も一人ずつ存在した。四六人が敢えて「健康」と明記された事實は、当時のイスタンブルにおいて身体強健な者が物乞いとして公認され得たことを示唆しており、また他者の障害や病に関する記述の信憑性を高める点でもとりわけ注目に値するといえよう。

②地中海諸島・③ルメリ・④アナトリア出身者には各人により具体的な出身地が記されている。②地中海諸島ではロドス島 Rodos ceziresi 出身者が五人と最も多く、次いでキプロス島 Kıbrıs ceziresi とペロポネソス半島 Mora が四人、クレタ島 Girit ceziresi が三人、フォチャ Foça、コルフ島 Korfa ceziresi、ザキントス島 Zanta ceziresi の各地が二人ずつ、その他にリムノス Limni・レスボス Midilli・ミコンス Mikonos・パロス Baroz・イムロス Imroz・キトノス Kimoz の各島やゲリボル Gelibolu やイズミル Izmir などの出身者が一人ずつみられる。③ルメリではエディルネ出身者が一二人と多いが、それ以外はテキルダール Tekirdağ が三人、フィリペ Filibe、

オフリド Ohi、ヴァルナ Varna、イエニシエヒル Yenise-hir が二人ずつであり、エスキ・ザーラ Eski zağra、クルクキリセ Kurkilişe、ソフィア Sofya などは僅か一人であった。同じく④アナトリアではスィノプ Sinop 出身者が四人と最多であり、以下ブルサ Bursa とカイセリ Kayseriye が二人ずつ、カラマン Karaman、ダマスカス Şam、シレシエが一人ずつであった。また、⑤イスタンブル出身者および出身地不明の者のうち前者であることが明確な者は「地元出身 (yerli)」と記された五〇人と「ガラタ」と記された一人を合わせた計五一人である。これらのことから、当時のイスタンブルにおけるキリスト教徒の物乞いは①キオス島出身者と⑤イスタンブル出身者が比較的多数を占めており、②地中海諸島と③ルメリと④アナトリアの出身者には具体的な地域や都市の偏りが殆どみられなかったということができよう。

次に九八人に記されたイスタンブル滞在歴をみてみると、最短は「来たばかりである (henüz gelmişir)」のように記された新来の九人であり、最長はイエニシエヒル出身であるペトロ Petro の五二年である。この九八人のうち滞在歴が一〇年未満の者は三八人であるのに対して、一年以上一〇年未満は三四人、一〇年以上は二六人

であり、その分布に大きな偏りはみられない。このことから少なくとも彼らのイスタンブルへの移住は五〇年以上前からある程度継続的に行われていたと推察される。

また、八ヶ月の滞在歴をもつキオス島出身の一九人や一五年の滞在歴をもつギョリュジェ Görlüce 出身の六人のアルバニア人 Arnavd といった滞在歴の一致する複数の同郷者の存在が確認されるが、こうした者たちについては同時期に集団で移住した可能性が考えられる。

この他にもごく稀に各人の特徴を示す記述が観察される。それによると、キオス島出身のマルヤ Marya とブルサ出身のある老者はともに債務者 (borçlu, mediyün) であり、一年前と八年前にコルフ島から来たニコラ Nikola とカトリナ Katorina は奴隷 (esir) であった。新来のヤニ Yani は、ウンカパス Unkapanı に立地し、フリスト Hristo が経営する塩漬けの魚卵を売る店舗 (havyarçı dükkanı) に住んだ。五〇年の滞在歴をもつ老者アナシュタシュ Anastas とその他三人は「ロシア人 Rus」であった。さらにキプロス島出身のパナヨト Panayot とニコラ Nikola には「仕立屋 (terzi)」との記述があり、二人の娘をもつマルヤ Marya には「夫が帝國艦隊 (donanma-yı himâyün) で出征した」と記され

ている。

このように一八世紀前半のイスタンブルにおけるキリスト教徒の物乞いは、キオス島を始めとする各地からの移住者とイスタンブル出身者から成り、出身地や配偶者・子供の有無、障害の有無や健康状態、イスタンブルの滞在歴などを異にする多様な人々であった。前述の先行研究において政府は少なくとも一八世紀後半まで老者・病者・障害者などに限定して物乞いを容認したとされてきたが、これまで検討してきたようにキリスト教徒の物乞いには「健康」と看做された四六人も含まれており、彼らが政府による処罰や排除の対象となった形跡はみられなかった。また、この台帳が作成された背景や過程は明らかでないが、出身地や滞在歴といった物乞いの来歴を重視するその性格と、一七三〇年のパトロナ・ハリルの反乱以降、警戒を強めた政府が特定集団・地区の住民調査や「不審者」の取締りを強化した事実<sup>(6)</sup>とを合わせて考えると、この台帳もそうした政策の一環として作成されたと推察される。

#### 四

以上、本稿では近世オスマン帝国都市の慈善・救貧に

関する研究の現状と課題を整理し、その上で一八世紀前半のイスタンブルにおける物乞いについて基礎的な考察を試みた。慈善・救貧をめぐる本格的な研究は、一九八〇年代から給食所の実態解明を中心に進められ、二〇〇〇年代以降、その対象は病院やアヴァールズ・ワクフ、同職組合ワクフ、貧者・弱者などへと徐々に広がりつつある。慈善・救貧の多様性を踏まえつつ、史料の丹念な読解をとおして個々の実態解明を続けていくことが今後の最大の課題といえよう。また、社会史研究の重要なテーマである支配者と被支配者の関係や社会的結合関係について、慈善・救貧の政治的役割や貧者・弱者の選別化・差別化、アヴァールズ・ワクフ、同職組合ワクフ、子供への慈善などの検討をとおして議論を深めていく必要があるだろう。

本稿で検討したキリスト教徒の物乞いに関する一七三六年付の台帳には、名前や出身地、配偶者・子供の有無、障害の有無や健康状態、イスタンブル滞在歴などの比較的详细な個人の情報が記録されており、その分析から地中海諸島やバルカン、アナトリアなどからの移住者とイスタンブル出身者で構成された彼らの多様性が明らかとなった。この台帳の分析に主眼をおいた本稿では、その

史料的制約から彼らの活動範囲や職業的な物乞い、集団化・組織化などの問題を検証することができなかった。こうした活動を明らかにするためには、今後、法廷台帳を始めとする諸史料の網羅的な調査・分析とそれに基づく事例の蓄積を続けていかなければならないであろう。

## 註

- (1) Yediyıldız, Bahaddin, "Turkish Wakf, or Turkish System of Charities in the Ottoman Era", in Kemal Çiçek (ed.), *The Great Ottoman-Turkish Civilisation*, vol. 3, Ankara: Yeni Türkiye, 2000, pp. 763-789; Degülhem, Randi, "Wakf (IV. in the Ottoman Empire to 1914)", in *Encyclopedia of Islam*, 2nd ed., vol. 11, 2002, pp. 87-92, esp. 88; Faroqli, Suraiya, "Pious Foundations in the Ottoman Society of Anatolia and Rumelia: A Report on Current Research", in Michael Borgolte (ed.), *Stiftungen in Christentum, Judentum und Islam vor der Moderne. Auf der Suche nach ihren Gemeinsamkeiten und Unterschieden in rechtlichen Grundlagen, praktischen Zwecken und historischen Transformationen*, Berlin: Akademie, 2005, pp. 223-256.
- (2) Singer, Amy, *Charity in Islamic Societies*, Cambridge/New York: Cambridge University Press, 2008. 特にあらゆる地域・時代の具体的活動を年中进行事・人生儀礼・ワクフの三つに分類・整理した七二—一三頁は示唆に富

49。

- (3) Singer, *Charity in Islamic Societies*, p. 49.
- (4) 給食所の概要をTannan, M. Baha, "Imareter", in *Dünden Bağine İstanbul Ansiklopedisi*, vol. 4, 1994, pp. 164-166; Ertuğ, Zeynep Tarrn, "Imaret", in *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 22, 2000, pp. 219-220; Singer, Amy, "Imarets", in Hasan Celal Güzel, C. Cem Oğuz & Osman Karatay (eds.), *The Turks*, vol. 3, Ankara: Yeni Türkiye Yayınları, 2002, pp. 657-664; Ergin, Nina, Christoph K. Neumann & Amy Singer, "Introduction", in id. (eds.), *Feeding People, Feeding Power: Imarets in the Ottoman Empire*, Istanbul: Eren Yayınları, 2007, pp. 13-17; Singer, Amy, "Imaret", in Christine Woodhead (ed.), *The Ottoman World*, London/New York: Routledge, 2012, pp. 72-85 参考(5)。(6)。
- (5) 給食所の慈善・救済機能に着目した初期の研究としてErgin, Osman, *Türk Şehirlerinde İmarat Sistemi*, Istanbul: Cumburiyet Matbaası, 1939; Ünver, A. Süleyl, *Fatih Aşhânesi Tevzi'nâmesi*, Istanbul: İstanbul Fethi Derneği Yayınları, 1953; Barkan, Ömer Lütfi, "Şehirlerin Teşekkül ve İnkışah Tarihî Bakımından Osmanlı İmparatorluğunda İmarât Siyasetinin Kuruluş ve İşleyiş Tarzına Âit Araştırmalar", *İstanbul Üniversitesi İktisat Fakültesi Mecmuası*, 23/1-2 (1962-63), pp. 239-296 参考(6)。(7)。(8)。(9) 給食所研究の動向についてはErgin, et al., "Introduction", pp. 18-22; Singer, "Imaret", pp. 74-75 参考(6)。(7)。(8)。(9)。

近世オスマン帝国都市の慈善と救済

- (6) Gerber, Haim, "The Waqf Institution in Early Ottoman Edirne", *Asian and African Studies*, 17/1-3 (1983), pp. 43-45. エネーリスの給食所についてはKazancıgil, Ratiıp, *Edirne İmaretleri*, Istanbul: Türk Kültürhaneçiler Derneği, 1991 参考(7)。

- (7) 林佳世子「オスマン都市の慈善施設「イマレット」の生活」『東洋文化』第六九巻(一九八九年)「一一九—一四四頁」。この給食所についてはUran, Fahri, *Karınluşundan Günümüze Fatih Kütülyesi*, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 2003, pp. 86-89, 297-308 参考(8)。(9) 林の見方と同様について世界銀行の報告書「複合施設Selimiye Kütülyesiの給食所に関するFaroghi, Suraiya, *Towns and Townsmen of Ottoman Anatolia: Trade, Crafts and Food Production in an Urban Setting, 1520-1650*, Cambridge/New York: Cambridge University Press, 1984, p. 210。複合施設を隣接するメズレヴァー教団修道場の職員や修道者(derviş)の訪問客への食事の提供をその中心的役割とした。その他に18世紀イスタンブルのムフテヘルムムー一世による給食所を検討したYediyıldız, Bahaeeddin, *Institution du waqf au XVIIIe siècle en Turquie: étude socio-historique*, Ankara: Société d'histoire Turque, 1985, pp. 255-256 参考(9)。
- (8) 例としてPeri, Oded, "The Waqf as an Instrument to Increase and Consolidate Political Power: The Case of Kılışçekî Sultân Waqf in Late Eighteenth-Century Ottoman Jerusalem", *Asian and African Studies*, 17/1-3

一五三 (三三七)

- (1983), pp. 47-62; Natshah, Yusuf, "Al-'Imara al-'Amira", in Sylvia Auld & Robert Hillenbrand (eds.), *Ottoman Jerusalem : The Living City : 1517-1917*, London : Atlatir World of Islam Trust, 2000, pp. 747-790; Singer, Amy, *Constructing Ottoman Beneficence : An Imperial Soup Kitchen in Jerusalem*, Albany : State University of New York Press, 2002.
- (9) 中谷進次郎「イマレット」; id., "Serving Up Charity: The Ottoman Public Kitchen", *Journal of Interdisciplinary History*, 35/3 (2005), pp. 481-500; id., "Mapping Imarets", in Ergin, et al., *Feeding People*, pp. 43-55. トルコ地方における給食所の分布については、シンガーの研究を大幅に補足・修正した Lowry, Heath W., "The Role of Imarets & Zâviyes in the Settlement of the Greek Lands, 1370-1670", in id., *The Shaping of the Ottoman Balkans, 1350-1550 : The Conquest, Settlement & Infrastructural Development of Northern Greece*, Istanbul : Bahçeşehir University Publications, 2010, pp. 68-73. 参照。
- (10) Neumann, Christoph K., "Remarks on the Symbolism of Ottoman Imarets", in Ergin, et al., *Feeding People*, pp. 275-286. 給食所の象徴性・儀礼性については Singer, *Constructing Ottoman Beneficence*, pp. 154-157; id., "Imaret", p. 84. 参照。
- (11) Lowry, Heath W., "Random Musings on the Origins of Ottoman Charity: From Mekece to Bursa, Iznik and Beyoğlu", in Ergin, et al., *Feeding People*, pp. 69-79; Norman, York, "Imarets, Islamization and Urban Development in Sarajevo, 1461-1604", in Ergin, et al., *Feeding People*, pp. 81-94; Lowry, "The Role of Imarets & Zâviyes".
- (12) Şehsuvaroğlu, Bedi N., *İstanbulda 500 Yıllık Sağlık Hayatımız*, İstanbul : Kemal Matbaası, 1953.
- (13) Unan, *Karulağundan Günümüze Fâth Kütüyesi*, pp. 76-82, 274-289; Çetin, Osman, *İlk Osmanlı Hastanesi Bursa Yılların Dârişşifesi (Bursa Mahkeme Sicillerine Göre)*, İstanbul : Göz Nurunu Korumaya Vakfı, 2006.
- (14) Shefer, Miri, "Charity and Hospitality: Hospitals in the Ottoman Empire in the Early Modern Period", in Michael Bonner, Mine Ener & Amy Singer (eds.), *Poverty and Charity in Middle Eastern Contexts*, Albany : State University of New York Press, 2003, pp. 121-143; Shefer-Mossensohn, Miri, *Ottoman Medicine : Healing and Medical Institutions, 1500-1700*, Albany : State University of New York Press, 2009, pp. 101-144.
- (15) 現金フロントに関する従来の研究では、その成立と普及のほか、有利子の貸与による財源運用の合法性をめぐって法學論争や各地域・時代の実態などが主に検討されてきた。その研究動向については、一先、Kaya, Süleyman, "Para Vakıfları Üzerine", *Türkiye Araştırmaları Literatür Dergisi*, 1/1 (2003), pp. 189-203. 参照。
- (16) アンマールス・フロンツの概要については İpsirli, Mehmet, "Avânız Vakfı", in *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm*

*Ansiklopedisi*, vol. 4, 1991, p. 109; Degülhem, “Wakf”, p. 90; Özcan, Tahsin, *Osmanlı Para Vakıfları : Kanuni Dönemi Üsküdar Örneği*, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 2003, pp. 80–82; Akda, Adalet Bayramoğlu, *Osmanlı Şehrinde Mahalle*, İstanbul: Sünner Kitabevi, 2008, pp. 171–174 ※参照。

- (17) 徳永忠 Özdemir, Rifat, “Ankara Hatuni Mahallesi Nakit Avazı Vakfının Kredi Kaynağı Açısından Önemi (1785–1802)”, in *V. Milletlerarası Türkiye Sosyal ve İktisat Tarihi Kongresi : Tebliğler : Marmara Üniversitesi , Türkiye Araştırma ve Uygulama Merkezi, İstanbul 21–25 Ağustos 1989*, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 1990, pp. 733–754; Behar, Cem, *A Neighborhood in Ottoman Istanbul : Fruii Vendors and Civil Servants in the Kasap İyas Mahalle*, Albany: State University of New York Press, 2003, pp. 67–68; Çiftçi, Ceter, “Osmanlı’da Mahalle Avânız Vakıfları : Bursa Örneği (1749–1784)”, *Akademik Araştırmalar Dergisi*, 29 (2006), pp. 51–69. 一八世紀ヨーロッパの Marcus, Abraham, *The Middle East on the Eve of Modernity : Aleppo in the Eighteenth Century*, New York: Columbia University Press, 1989, pp. 215–216 ※参照。
- (18) Çiftçi, “Osmanlı’da Mahalle Avânız Vakıfları”. その収益は病者の治療費や貧者の結婚・葬儀費用、新参者や帰郷者への支援に充てられたものと考えられた。 Beydilli, Kemal, *Osmanlı Döneminde İnançlar ve Bir İnanım Günlüğü*, İstanbul: Tarih ve Tabiat Vakfı (TATAV) Yayınları, 2001, pp. 9–10 ※参照。

(19) Singer, *Charity in Islamic Societies*, p. 72.

- (20) 一七世紀後半から一八世紀前半の Faruqi, Surāya, “Ottoman Guilds in Leiden/Boston: Brill, 2004, pp. 61–62, 85, 160–162 ※”、一八世紀後半から一十九世紀前半の Faruqi, Surāya, “Ottoman Guilds in the Late Eighteenth Century : The Bursa Case”, in id., *Making a Living in the Ottoman Lands, 1480 to 1820*, Istanbul: Isis Press, 1995, pp. 109–114; Çiftçi, Ceter, “18. Yüzyılda Bursa’da Para Vakıfları ve Kredi İşlemleri”, *Tarih Araştırmaları Dergisi*, 23/36 (2004), pp. 93, 98; Koyuncu Kaya, Miyase, “18. Yüzyıl İkinci Yarısında Bursa’da Esnafın Mali Durumuna Örnekler”, *EKEV Akademi Dergisi*, 40 (2009), pp. 272–274 ※参照。

- (21) Yi, *Guild Dynamics*, p. 85. 同職組合が大規模な食事の施しや実施した行楽行事 (teferitic) には未だ不明な点が多いため、一先を Ascēric-Todd, Ines, “The Noble Traders: The Islamic Tradition of “Spiritual Chivalry” (futuwwa) in Bosnian Trade-guilds (16th–19th Centuries)”, *Muslim World*, 97 (2007), p. 168; Filan, Kerima, “Eğence Kültür Mirası Olabilir Mi? : Saraybosna’da XVIII. Yüzyılda Yıganan Halk Eğlenceleri”, in Zeki Dilek (ed.), 38. ICANAS (Uluslararası Asya ve Kuzey Afrika Çalışmaları Kongresi) : *Bildiriler : Tarih ve Medeniyetler Tarihi 15 Eylül 2007*, Ankara, vol. 3, Ankara: Atatürk Kültür, Dil ve Tarih



- Yüksək Kurumu, 2011, pp. 1366–1369 ※参照。
- (22) Rozen, Minna, “A Pound of Flesh : The Meat Trade and Social Struggle in Jewish Istanbul, 1700–1923”, in Suraiya Farooqi & Randi Deguilhem (eds.), *Crafts and Craftsman of the Middle East*, London/New York : I. B. Tauris, 2005, p. 204.
- (23) Hoexter, Miriam, “Charity, the Poor, and Distribution of Alms in Ottoman Algiers”, in Bonner, et al., *Poverty and Charity*, p. 148; Ayalon, Yaron, *Natural Disasters in the Ottoman Empire : Plague, Famine, and Other Misfortunes*, New York : Cambridge University Press, 2015, pp. 42–44.
- (24) Ginio, Eyal, “Living on the Margins of Charity : Coping with Poverty in an Ottoman Provincial City”, in Bonner, et al., *Poverty and Charity*, pp. 165–184.
- (25) かごの社会経済史研究では都市経済の一端をこの貧者の人口や遺産額のみ分析が行われた。例として Inalcık, Halil, “15. Asır Türkiye İktisadi ve İctimai Tarihî Kaynakları”, *İstanbul Üniversitesi İktisat Fakültesi Mecmuası*, 15/1–4 (1953–54), p. 56; Gerber, Haim, *Economy and Society in an Ottoman City : Bursa, 1600–1700*, Jerusalem : Hebrew University, 1988, pp. 24–27 ※参照。
- (26) 堀 孝雄 Hoexter, “Charity, the Poor”, pp. 148–150; Singer, *Charity in Islamic Societies*, p. 100.
- (27) Ginio, “Living on the Margins”, pp. 169–172.
- (28) Ginio, “Living on the Margins”, pp. 166–167, 173–177.
- 貧者の主体的性格を強調した同様の見方として Singer, *Charity in Islamic Societies*, p. 147 ※参照。
- (29) 請願制度の概説として Inalcık, Halil, “Şikâyet Hakkı : ‘Arzî Hâl ve ‘Arzî Mahzar’lar”, *Osmanlı Araştırmaları*, 7–8 (1988), pp. 33–54; İpsirli, Mehmet, “Arzihal”, in *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 3, 1991, pp. 447–448; Ben-Bassat, Yuval, *Petitioning the Sultan : Protests and Justice in Late Ottoman Palestine 1865–1908*, London/New York : I. B. Tauris, 2013, pp. 28–33 ※参照。
- (30) Tekin, Zeki, “Osmanlı Döneminde Diğencilik”, in Güler Eren (ed.), *Osmanlı*, vol. 5, Ankara : Yeni Türkiye Yayınları, 1999, p. 575. ※この巻の巻頭として Özbek, Nadir, “Osmanlı İmparatorluğu’nda Diğencilere Yönelik Devlet Politikaları ve Kâmusal Söylenim Değişimi”, in Korkut Tuna & Suvat Parin (eds.), *Bir Kent Sorunu : Diğencilik : Sorunlar ve Çözüm Yolları : 18–19 Ekim 2008 : Sempozyum Bildirileri*, İstanbul : İBB Zabta Daire Başkanlığı, 2008, p. 19; Singer, *Charity in Islamic Societies*, pp. 149–150 ※参照。
- (31) Gladi, A., “Sağlır”, in *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., vol. 8, 1995, p. 826; Singer, *Charity in Islamic Societies*, p. 194.
- (32) Unan, *Kuruluşundan Günümüze Faith Kulliyesi*, p. 291; Arz. Yahya, 16. *Yüzyıldan 19. Yüzyıl Başlarına Osmanlı Toplumunda Çocuk Olmak*, İstanbul : Kitap Yayınevi,

2013, pp. 112–113.

- (33) Yediyıldız, *Institution du waqf*, p. 215.
- (34) Cezar, Yavuz, “18. Yüzyılda Eyyüp'te Para ve Kredi Konularına Üzerine Gözlemler”, in Tülay Artan (ed.), *18. Yüzyıl Katal Sicilleri Işığında Eyyüp'te Sosyal Yaşam*, İstanbul : Tarih Vakfı Yurt Yayınları, 1998, pp. 28–29; Çiftçi, Cafer, “Osmanlı Döneminde Bursa'da Eytâm Keseleri”, *Uludağ Üniversitesi Fen-Edebiyat Fakültesi Sosyal Bilimler Dergisi*, 4/5 (2003), pp. 81–96.
- (35) Abacı, Nurcan, *Bursa Şehrinde Osmanlı Hukukunun Uygulanması (17. Yüzyıl)*, Ankara : T.C. Kültür Bakanlığı, 2001, pp. 180–181; Peirce, Leslie, *Morality Tales : Law and Gender in the Ottoman Court of Aintab*, Berkeley : University of California Press, 2003, p. 151; Araz, *Osmanlı Toplumunda Çocuk Olmak*, p. 161. マリスを捨児や近世オスマン社会の例外的な事象と見做したが、マリスの見方の妥当性については今後実証的な検討が必要とされる。
- (36) Faroqhi, *Towns and Townsmen*, pp. 279–280; Abacı, *Bursa Şehrinde Osmanlı Hukuku*, pp. 180–181; Ginitio, “Living on the Margins”, pp. 173–176; Peirce, *Morality Tales*, p. 151; Kerneli, Eugenia, “Children Treated as Commodity in Ottoman Crete”, in id. & Okay Özel (eds.), *The Ottoman Empire : Myths, Realities and ‘Black Holes’ : Contributions in Honour of Colin Imber*, İstanbul : Isis Press, 2006, pp. 277–280; Araz, *Osmanlı Toplumunda Çocuk Olmak*, pp. 155–156, 168–174. マリスやマリスミトの

近世オスマン帝国都市の慈善と救済

研究によれば、子供を家事使用人とするこの行為は史料に基いて「養育 (terbiye, besleme)」を本来オスマン法で禁止された「養子縁組 (tebenni)」と呼ばれ、この

- (37) Ginitio, “Living on the Margins”, pp. 173–176.
- (38) Araz, *Osmanlı Toplumunda Çocuk Olmak*, pp. 156–157, 175.
- (39) Araz, *Osmanlı Toplumunda Çocuk Olmak*, pp. 156–158.
- (40) この教会・修道院のローソクや香燭の研究による課題については、Faroqhi, “Pious Foundations”, pp. 252–253; Singer, *Charity in Islamic Societies*, p. 99; Laiou, Sophia, “Diverging Realities of a Christian Vakıf, Sixteenth to Eighteenth Centuries”, *Turkish Historical Review*, 3/1 (2012), pp. 1–18 を参照。
- (41) Rozen, Minna, *A History of the Jewish Community of Istanbul : The Formative Years 1453–1566*, Leiden/Boston : Brill, 2002, pp. 214–220.
- (42) Alexander, John & Sophia Laiou, “Health and Philanthropy Among the Ottoman Orthodox Population, Eighteenth to Early Nineteenth Century”, *Turkish Historical Review*, 5/1 (2014), pp. 1–15. マリス史研究ではマリスオスマン社会のトマスや教徒共同体に関する Ayalon, Yaron, “Poor Relief in Ottoman Jewish Communities”, in Arnold E. Franklin, Roxani Eleni Margariti & Marina Rustow (eds.), *Jews, Christians and Muslims in Medieval and Early Modern Times : A Festschrift in Honor of Mark R. Co-*

- hen, Leiden : Brill, 2014, pp. 67-82 が重要であろう。また、一八世紀アムステルダムにおけるキリスト教徒・ユダヤ教徒の各共同体における慈善・救貧制度のほか、前述の後見入制度や家事使用人については、Marcus, *The Middle East*, pp. 202, 208, 216-217 を参照。
- (43) 慈善・救貧史研究におけるワットフ調査台帳の史料的重要性を改めて示した研究として、その記述から食糧・衣服の施しの具体的内容を検討した Yerasimos, Stéphane, “Feeding the Hungry. Clothing the Naked : Food and Clothing Endowments in Sixteenth-Century Istanbul”, in Ergin, et al., *Feeding People*, pp. 241-249 を参照。
- (44) 修道場の運営と社会的役割に関する研究に Faroqhi, Suraiya, “Agricultural Crisis and the Art of Flute-Playing : The Worldly Affairs of the Mevlevi Dervishes (1595-1652)”, *Turcica*, 20 (1988), pp. 43-70 を参照。
- (45) 「金曜行列」に関する İpşirli, Mehmet, “Osmanlılarda Cuma Selâmlığı (Halk-Hükümdar Münâsebetleri Açısından Önemli)”, in Prof. Dr. Bekir Kütükoğlu'na Armağan, İstanbul : İstanbul Üniversitesi Tarih Araştırma Merkezi, 1991, pp. 459-471 を参照。
- (46) 「王家の祝祭」かみの慈善機能に関するその基礎的研究として Faroqhi, Suraiya, “Bringing Gifts and Receiving Them : The Ottoman Sultan and His Guests at the Festival of 1720”, in Barbara Schmidt-Haberkamp (ed.), *Europa und die Türkei im 18. Jahrhundert*, Göttingen / Bonn : V&R unipress/Bonn University Press, 2011, pp. 383-402 を参照。
- (47) 癩病院に関する Yıldırım, Nuran, “Miskinler Tekkesi”, in *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 30, 2005, pp. 185-186; Sarı, Nil & Ümit E. Kurt, “Üsküdar Miskinler Tekkesi”, in Bülent Özalpay, Nuran Yıldırım & Murat Çekin (eds.), Prof. Dr. Ali Haydar Boyat Anısına Düzenlenen Osmanlı Sağlık Kurumları Sempozyumu : 2 Haziran 2007, İstanbul : Zeytinburnu Belediyesi, 2008, pp. 81-109 を参照。
- (48) Gökteg, Ugur, “Kilhanbeyleri”, in *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, vol. 5, 1994, p. 164; Boyar, Ebru & Kate Fleet, *A Social History of Ottoman Istanbul*, Cambridge/New York : Cambridge University Press, 2010, pp. 253-254.
- (49) 例として Singer, Amy, “Charity”, in Gabor Ágoston & Bruce Masters (eds.), *Encyclopedia of the Ottoman Empire*, New York : Facts on File, 2009, p. 137; Ayalon, *Natural Disasters*, pp. 42-44.
- (50) Genç, Mehmet, “Klasik Osmanlı Sosyalikitsadi Sistemi ve Vakıflar”, *Vakıflar Dergisi*, 42 (2014), p. 16.
- (51) 例として Scalenghe, Sara, *Disability in the Ottoman Arab World, 1500 - 1800*, New York : Cambridge University Press, 2014, pp. 84-85.
- (52) 「オスマンの国」に関する Acun, Hakkı, “Tas (Türk Kültüründe Taş Türleri)”, in *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 40, 2011, p. 143; Acar, Şimşek, “İs-

- tambul'da Sadaka Taşları", in Coşkun Yılmaz (ed.), *Avrık Çağ'dan XXI. Yüzyıla Büyük İstanbul Tarihi*, vol. 4, İstanbul: İBB Kültür AŞ./İSAM, 2016, pp. 449-451 を参照。
- (53) りれごごりびぢ Gınio, "Living on the Margins", pp. 165-165; Singer, *Charity in Islamic Societies*, p. 106 を参照。
- (54) これに関連する研究として、ワックフ財源である商館 (han) の建設・修復を商業・経済発展や人口増加と関連付けて論じた Murphy, Rhoads, "The Growth in Istanbul's Commercial Capacity, 1700-1765: The Role of New Commercial Construction and Renovation in Urban Renewal", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 61/1-2 (2008), pp. 147-155 が有名。また、戦争や経済危機・自然災害に伴うワックフの衰退については Singer, *Charity in Islamic Societies*, pp. 108-109 を参照。
- (55) オスマン帝国の慈善が受けた影響の多様性・複合性については Singer, "Charity", p. 135 を参照。給食所の起源をめぐる考察には Ergin, et al., "Introduction", pp. 14, 16-17 がある。ビザンツ帝国との関係については、その宗教寄進とワックフの類似性を論じた Alexander & Laiou, "Health and Philanthropy", p. 7 のほか、オスマン帝国期に給食所やモスクに転用されたビザンツ帝国の宗教・慈善施設に関する林「イスラム都市の慈善施設」一二二—一二三頁および大月康弘「ビザンツ国家と慈善施設——皇帝・教会・市民をめぐる救貧制度」長谷部史彦(編)著『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会
- 二〇〇四年、一一四頁を参照された。
- (56) Tekin, "Osmanlı Döneminde Dilencilik"; Demirtaş, Mehmet, "Osmanlı Başkentinde Dilenciler ve Dilencilerin Toplum Hayatına Etkileri", *OTAM*, 20 (2006), pp. 81-104. それ以前の重要な事典項目として Koçu, Rışad Ekrem, "Dilenci, Dilenciler", in *İstanbul Ansiklopedisi*, vol. 8, İstanbul: Koçu Yayınları, 1966, pp. 4572-4577 を参照。
- (57) Özbeke, "Devlet Politikaları", pp. 17-21. 地方都市に関しては、一八世紀サラニカにおける解放・逃亡奴隷を中心とする物乞い集団とそれに対する地方当局の姿勢を検討した Gınio, "Living on the Margins", pp. 171-172 がある。アラブ史研究では一八世紀フランスの物乞いとの同職組合に関する Marcus, *The Middle East*, pp. 214-215 と、一八世紀末カイロのアスナール学院における物乞いと視覚障害の関係論じた Scalenghe, *Disability*, p. 83 がある。
- (58) 一八世紀末のイスタンブールにおける人口流入と社会不安、浮浪者や失業者の問題を論じた研究として Başaran, Betül, *Selim III, Social Control and Politics in Istanbul at the End of the Eighteenth Century: Between Crisis and Order*. Leiden/Boston: Brill, 2014 を参照。
- (59) Tekin, "Osmanlı Döneminde Dilencilik", p. 571; Demirtaş, "Osmanlı Başkentinde Dilenciler", pp. 83-84, 89-90; Boyar & Fleet, *A Social History*, p. 137 を参照。
- (60) Başbakanlık Osmanlı Arşivi, *Cevdet Belediye no. 7597*, d. 24 Saler 1149 (1736/74). 上の台帳の概要と史料的重

職社にこころいせ’ Tekin, “Osmanlı Döneminde Diyençilik”, p. 573; Demirtaş, “Osmanlı Başkentisinde Diyençiler”, pp. 86-87 本論註。

- (19) Başaran, *Selim III, Social Control*, pp. 36-40; id. & Cengiz Kirli, “Some Observations on Istanbul’s Artisans during the Reign of Selim III (1789-1808)”, in Suraiya Faroqhi (ed.), *Bread from the Lion’s Mouth: Artisans Struggling for a Livelihood in Ottoman Cities*, New York/London: Berghahn Books, 2015, pp. 260-263.